

スタンダリズム史関連資料：ジャン・ド・ミティ未 刊書簡

高木, 信宏
九州大学大学院人文科学研究院：准教授

<https://doi.org/10.15017/1793614>

出版情報：Stella. 35, pp.39-58, 2016-12-19. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

スタンダリズム史関連資料

——ジャン・ド・ミティ未刊書簡——

高 木 信 宏

当今、ジャン・ド・ミティという名を知る人はほとんどいまい。19世紀後半、ミシェル・レヴィ版スタンダール全集の出版が契機となって作家の再評価（あるいは発見と言うほうが適切か）の素地が整うなか、グルノーブル市立図書館に埋もれていた自筆草稿にもとづき、1894年にダンテュ書店から未完の長編『リュシアン・ルーヴェン』を、次いで97年には評伝『ナポレオン』を白色評論社から刊行し、カジミール・ストリヤンスキーやアドルフ・ポープ等と並び、スタンダリズムの形成に寄与した草分けである。とはいえ、その人物像についてはヴィクトル・デル・リットが「謎」の一語をもって評したように伝記的な側面を含めてほぼ未詳といってよく、ポープが『研究者と蒐集家の架け橋』誌1912年3月20日号に載せた、さして長くはない追悼記事が貴重な情報源となっている¹⁾。

これによれば、ミティは1862年12月25日、ルーマニアのクラヨーヴァに生まれた。本名はミルチャ・バーベ・ゴルフィナーノである²⁾。グルノーブルで学業を終えると、同地で芸術関連の小雑誌を編集する傍ら、スタンダールの草稿を解読した。1890年頃にパリに出ると、『メルキュール・ド・フランス』『白色評論』『レルミタージュ』等の文芸誌のほか、『フィガロ』『ル・マタン』『ジル・ブラス』などの日刊紙に寄稿しはじめ、ジャーナリストとして身を立てる。1897年に『ル・クリ・ド・パリ』誌の創刊に加わり、1908年まで編集長を務めた。この間に上記2作品の出版にくわえて、ユーグ・ルベルと『ある部屋係の日記』（1907年）を上梓している。1911年7月25日、ナポレオン所縁の地リュエイエユ＝マルメゾンで神経の病が高じ、世を去った。

スタンダリアン以外でミティの名を記憶する人がいるとすれば、おそらくポール・ヴァレリーの作家論の読者であろう。シャンピオン書店から1927年に

公刊された『リュシアン・ルーヴェン』の序文冒頭でヴァレリーはミティへの謝意を述べ、かつての交際を回顧している――

私たちはステファヌ・マラルメの家で出会った。そこに彼は毎週火曜日によく顔を出していたのである。この得難い夕べが散会すると、私たちは度々ふたりして雑談しながら、仄暗いローマ通りをとおって煌々たるパリの中心へ足向け、道すがら好んでナポレオンやスタンダールのことを話題にしたのだった。³⁾

ヴァレリーが1892年にスタンダールにかんする論文を書く計画を立て、2年後にはナポレオンを主題にして執筆を試みたことを考えると⁴⁾、この当時、未定稿『ルーヴェン』と『ナポレオン』の出版を準備していたミティとの話に花が咲いたであろうことは想像に難くない。1894年に刊行されるや否や、彼から贈られた『ルーヴェン』を読み、どれほど深く感動したかについて詩人はシャンピオン版の序文で率直に告白しているが、おそらくスタンダリスムの黎明期にあって彼らはある種の共感で結ばれていたように思われる。それは、いまだ真価の知られざる作家を見いだした喜びである。

しかしながら、ミティはスタンダールただひとりや仰ぎ見ていたわけではなかった。パリに来た当初、彼は文学的には対蹠点に位置するマラルメを敬慕し、火曜会での交際や人脈を含め、その影響の下で自身の道を開こうと模索していたようである。1894年12月15日からアプリケーション劇場で行った一連の講演では、『夜のガスパール』の詩人ベルラン、ボードレル、マラルメをとりあげたように⁵⁾、彼が象徴主義を中心にフランスの近代詩に傾倒していたのは確かであろう。これがスタンダール以外は眼中になかったポーブと大きく異なる点であり、しかもミティの賛美の対象は両作家だけに止まらなかった――オーリアンによれば、彼は他にもナポレオン、イグナチオ・デ・ロヨラ、ジョージ・ブライアン・ブランメル、タレーラン、モーリス・バレス等を敬仰していたらしい⁶⁾。このように多岐にわたる心酔の対象からは、彼本来の資質が研究者のそれではなく、ジャーナリズムにおいて発揮される類のものであったことが察せられよう。ポーブがスタンダールにかかわる書物や未刊の資料等を渉猟し、3巻からなる書簡集と2冊の研究書を上梓して作家の実証研究に貢献したのとは対照的に、ミティの編んだ『ルーヴェン』と『ナポレオン』はきわめて恣意的な本文の校訂が理由で研究者からは著しく低い評価を受けている。

さらにミティの人物像を示す興味深い出来事としては、彼が当事者となった2度の決闘が挙げられよう⁷⁾。とりわけ小説家コレットの夫ウィリーとのそれは、当時パリでは少なからず反響を呼んだにちがいない。たとえばポール・レオトーは、故ジャン・ド・ティナンの両親に招かれた夕食の席でウィリーに話が及ぶと、『クローディーヌは行ってしまう』(1903年)に「ド・キャトルズール氏 Monsieur de Quatorzheures」という変名で登場するミティとの決闘のことが話題になった、と後日『文学日記』(1903年4月7日の記述)に書きとめている⁸⁾。オーリアンもミティと劇評家のフランシスク・サルサーとの諍いに言及しており⁹⁾、この手の逸話に事欠かない人物だったようだ。ヴァレリーが『ルーヴェン』の序文で、「それにこの出版だけでなくミティ本人を狙った厳しい非難にしても、たぶんにその種を彼が自分で蒔いたことを知らぬわけではない」¹⁰⁾と仄めかしているのは、虚言癖のみならず、血の気が多く敵をつくりやすい一面だったのではないだろうか。

これに類する軋轢はどうやらギヨーム・アポリネールとの間でもあったようである。それが窺い知れるのは、後掲する詩人宛未刊書簡の最後のものであり、文面はさながら絶縁状である——「私を驚かせ、悲しませる貴兄の態度を前にしたからには、もう私を当てにしないようお願いする」。同書簡に日付は打たれておらず、マックス・ジャコブを介して渡されたため消印もないので、ふたりの間に齟齬がいつ生じたのかを特定するのはむづかしい。だが、『ル・クリ・ド・パリ』誌の便箋と封筒が使用されているので、ミティが同誌の編集を離れる1908年の春以前に書かれたことはまず確かである¹¹⁾。

別のアポリネール宛未刊書簡のなかでミティは、詩人の短篇『アルバニア人』の掲載延期を告げているが、実際に作品が公になったのは『ル・クリ・ド・パリ』誌ではなく、『メシドール』紙1907年9月7日号である。後者への寄稿をめぐっては、詩人の友人アンリ・フリックがテアトル・シヰヰックの創立者ルイ・リュメに熱心に推薦したおかげで実現にこぎつけた経緯があり、フリックはアポリネールに「150から180行——過度に軽薄なものは一切なし——『メシドール』の読者はお上品である」と1907年7月19日付の書簡で指示している¹²⁾。つまり、フリックの手紙よりも前に『ル・クリ・ド・パリ』誌への『アルバニア人』掲載の話が帳消しになっていたのは明らかであり、その原因はミティに前掲の厳しい手紙を書かせた何らかの揉め事ではなかったか。

ところで、アポリネールは同じ年の3月に『サンスール』誌のマックス・デローと一悶着を起こしている。発端はこのアルゼンチン人ジャーナリストが彼を揶揄する文章を同誌に載せたことであったが、詩人のほうも書簡体詩で応酬し、決闘を申し入れた。その際にアポリネールが介添人として『サンスール』誌側に派遣したのが、マックス・ジャコブとミティだったのである。デローも編集部秘書のアンドレ・ベイも不在だったため決闘にはいたらなかったものの、噂はバリ中を駆け巡ったという¹³⁾。デュエルの介添人を引き受ける間柄なので、1907年3月の時点でのミティとアポリネールの関係は良好であったはずで、そうするとこれ以後に何らかの理由で彼らが仲違いした蓋然性が高い。

興味深いのは、翌年8月にフェルナンド・オリヴィエからアポリネールに届いた書簡である。彼女は恋人のピカソや友人らとオアーツ県の小村ラ＝リュ＝デ＝ボアに逗留しており、詩人が合流するのを皆で待ちわびていた。手紙では画家の自筆メッセージにジャコブのそれが続く——「親愛なる友よ、僕たちは君を今か今かと待っている。ジャン・ド・ミティからの友情の握手。マックス・ジャコブ」¹⁴⁾。間接的ながらもここに示されたミティの好意から推測するなら、彼らはこの時期には和解していたのだろう。彼の亡くなった年、アポリネールは『メルキュール・ド・フランス』誌上で故人を偲んでいる¹⁵⁾。

はたしてアポリネールとミティの間に確執が生じ、それがもって『アルバニア人』の掲載はとりやめになったのか。この問題については、今後『ル・クリ・ド・パリ』誌や書簡の消印等の調査を通じて考証をさらに深めたい。

さて、スタンダリアンとしてのミティの業績に目を向けると、前述の2書を除けばめぼしいものはない。管見した範囲では論文が4篇、書評4篇、エッセーが6篇といったところである¹⁶⁾。彼の功績としては、やはり『リュシアン・ルーヴェン』と『ナポレオン』のテキストを不完全ながらも初めてまとまった姿で世に送り出したという点に尽きるだろう——前者についてはミシェル・レヴィ版の『緑の獵人』(1854年)があったが、口述筆記草稿分の18章までしか活字になっていない。とくに『ルーヴェン』は1927年にシャンピオン書店からアンリ・ドブレによる校訂版が出版されるまでの間、白色評論社(1901年)とル・リーブル書店(1923年)から再版されている。彼のテキストが時代の要請に応えるかたちでスタンダールの読者層の拡大に貢献したのだとすると、受容史的には一考の価値があるはずだ。1940年8月、ヴァレリーは『カイエ』に次のよ

うに記している——「94年にミティがくれた『ルーヴェン』が、このうえなく私が明晰だった時期にもかかわらず、ルーヴェンとシャストレルの恋を様々に描き出す、その並外れた繊細さによって、どれほど我が心を動かしたかを想いだす」¹⁷⁾。晩年のヴァレリーが書きとめた追憶は、時として文学のテキストが、たとえ校訂に瑕疵のあるそれであっても、個人の読書体験という次元においてはかけがえのない意味をもち続けることを証する好例であろう。ヴァレリーのほかに、こうした読者がいなかったとは考えにくい。

1911年にミティが他界すると、『ル・クリ・ド・パリ』『メルキュール・ド・フランス』『ジル・ブラース』『ル・タン』など、彼が生前に関係した新聞や雑誌を中心に9本の死亡記事が掲載された¹⁸⁾。ストリヤンスキーやポープの場合を凌ぐその数は、文壇やジャーナリズムでの幅広い交際を反映したものであろう。以下で我々が活字にする未刊書簡は、そうしたミティの全貌を映しだすにはほど遠いが、これまでほとんど等閑に付されてきたジャーナリストとしての彼の横顔をいささかでも垣間見させてくれるのではないだろうか。

註

- *) 本稿は「JSPS 科研費：課題番号 16K02537」の助成を受けた研究の一部である。
- 1) Victor DEL LITTO, «Documents inédits pour servir à l'histoire du stendhalisme. I - Paul Léautaud. II - Jean de Mitty», *Stendhal Club*, n° 101, 15 octobre 1983, pp. 13 et 22.
 - 2) これまでミティの本名について研究者の間で情報に異同が見られた。ポープは「Goldefineanu」と姓のみを記し、他方マラルメの書簡集の編者は「Demetrius Golfineano」という名を挙げ、生年と歿年を1868年と1943年としている。さらにアポリネールの総書簡集やポール・レオトーの日記などでは「Jean Golfineau」となっている (voir *ibid.*, p. 22; Stéphane MALLARMÉ, *Correspondance*, recueillie, classée et annotée par Henri MONDOR et Lloyd James AUSTIN, Paris : Gallimard, 11 vol., 1959-1985, t. VII, p. 123; Paul LÉAUTAUD, *Journal littéraire*, nouvelle éd. en 4 vol., Paris : Mercure de France, 1986, t. IV, p. 347; Guillaume APOLLINAIRE, *Correspondance générale*. Édition de Victor MARTIN-SCHMETS, Paris : Libr. Honoré Champion, 5 vol., 2015, t. III-2, p. 1100; cf. Laurence CAMPA, *Guillaume Apollinaire*, Paris : Gallimard, 2013, p. 214)。本稿では、近年訂正されたフランス国立図書館総目録の著者情報に従い、「Mircea Barbe Golfineano(nu)」とした。

- 3) Paul VALÉRY, « Au sujet de Stendhal. À propos de *Leuwen* », in *Lucien Leuwen I*, Texte établi et annoté avec un avant-propos par Henri DEBRAYE. Préface de P. VALÉRY, in *Œuvres complètes* de STENDHAL, publiées sous la direction d'Édouard CHAMPION et de Paul ARBELET, Paris : Libr. Honoré Champion, 28 vol., 1913-1934, t. VI, [1927], p. II.
- 4) Voir Paul VALÉRY, *Cahiers 1894-1914*. Édition intégrale établie, présentée et annotée sous la co-responsabilité de Nicole CELEYRETTE-PIETRI et Judith ROBINSON-VALÉRY, Paris : Gallimard, 13 vol., 1987-2016, t. III, pp. 468 et 613.
- 5) MALLARMÉ, *op. cit.*, t. VII, p. 87. 後掲するスペルベルク・ド・ロバンジュール宛未刊書簡中にも、これらの講演についての言及がある。
- 6) AURIANT [Alexandre HADJIVASSILIOU], « Histoire littéraire anecdotique. Deux originaux : Le comte Stanislas Rzewuski et M. de Mitty. Deux lettres inédites de Léon Bloy », *La NRF*, n° 349, 1^{er} mars 1943, p. 366.
- 7) Voir DEL LITTO, *art. cit.*, p. 14.
- 8) Voir LÉAUTAUD, *op. cit.*, t. I, pp. 68-69. なお、彼らの決闘の発端は、ウィリーが『クローディーヌは行ってしまう』のなかでミティを「ジャン・ド・カトルズール Jean de Katorzeur」という変名で呼び、笑い者に行っているのを後者が知ったことであつた。小説が本屋の店頭に並んだのが1903年3月17日、決闘は翌月3日にヌイイで行われ、ウィリーは剣によって脇腹に軽傷を負った (voir COLETTE, *Œuvres I*. Édition publiée sous la direction de Claude PICHOS, avec, pour ce volume, la collaboration d'Alain BRUNET, Léon DELANOÉ, Paul d'HOLLANDER, Jacques FRUGIER, Michel MERCIER et Madeleine RAAPHORST-ROUSSEAU, Paris : Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2 vol., 1984-1986, t. I, pp. 1381 et 1393 ; voir aussi Bernard LEHEMBRE, *Colette et Willy. Un amour à la Belle Époque*, Paris : Acropole, 2000, p. 155)。では、ミティを激怒させた問題の箇所を一部挙げておこう——「そして最後にきわめつきの人物、ジャン・ド・カトルズールが頭ひとつ抜きん出ていました。ほら、かつていかにもパリ風の恫喝雑誌でベルギー語を操る編集者だった、あの英国の馬丁面をしたセルビア人ですよ。とり澄ましたこのおかまは、カンバセレス流の素行を正当化するために帝政主義者を自称しています。アングルブーツのつま先でお前の商売道具をふさぐぞ、と私が奴を脅して以来、私に対して親切のかぎりを尽くしています——おそらく自分のお尻を確実に守るためでしょうけども。それに私はこいつの話に進んで耳を貸してやっています。というのも、いつだって何もかもひとつ残らずすっかり喋りたそうにしている、この悪口屋の締めりのない中傷のなかには、拾ってやってもよい役に立つ情報がしばしばあるからです。そういう訳で私たちは一緒に昼食をとりました […]」(COLETTE, *op. cit.*, t. I, pp. 647-648)。たとえナポレオン法典の起草者のひとり、ジャン＝ジャック・レジ・ド・カンバセレスが同性愛者であつたことを知らなくても、一読してミティの同性愛を当てこすった揶揄であるのが見てとれよう。20世紀初頭から第1次大戦までのパリでは決闘が

流行しており、ウィリーは「剣の達人 bretteur」として評判が立つのを強く望んでいたという (voir *ibid.*, t. I, p. 1393)。他方、ミティも「札付きの決闘好き」として名が通っていた (voir Armand WALLON, «Quatre premiers stendhaliens», *Stendhal Club*, n° 138, 15 janvier 1993, p. 108)。後述するアポリネールとマックス・デローの場合もそうだが、ウィリーとミティの一件は作家やジャーナリストたちが決闘も辞さない覚悟で挑発し合っていた様子を窺わせる一例であろう。なおミティが同性愛者であるという側面は、後掲のロベール・ド・モンテスキュー宛未刊書簡との関連でも興味深い。ところで、引用箇所は作中人物アンリ・モージスの長文の手紙に含まれているのだが、コレットは小説の終わりのほうで登場するこの書簡を1949年のフルーロン版全集では完全に削除した。理由は、ウィリーの影響が濃厚に表れたこの箇所を彼女が好んでいなかったからだと考えられている。以後、1954年と1977年のアルバン・ミシェル版でもモージスの書簡は再録されていない (voir COLETTE, *op. cit.*, t. I, p. 1409)。

- 9) Voir AURIANT, *art. cité*, p. 365.
- 10) VALÉRY, «Au sujet de Stendhal. À propos de *Leuwen*», *op. cit.*, p. II. この暗示についてミシェル・ジャルティはミティの虚言癖と解している (voir Paul VALÉRY, *Œuvres*. Édition, présentation et notes de Michel JARRETY, Paris : Le Livre de poche, coll. «La Pochothèque», 3 vol., 2016, t. I, p. 1132)。
- 11) 1908年3月10日付ポーブ宛書簡でミティは同誌をすでに離れた旨を伝えている。Voir DEL LITTO, *art. cité*, p. 21.
- 12) Voir CAMPA, *op. cit.*, p. 222.
- 13) Voir *ibid.*, pp. 214-215 ; voir aussi WALLON, *art. cité*, pp. 107-109 ; Pierre Marcel ADÉMA, *Guillaume Apollinaire*, Paris : La Table Ronde, 1968, pp. 118-119 ; LÉAUTAUD, *op. cit.*, t. I, pp. 923-924 ; André BILLY, *Apollinaire vivant*, avec une photographie inédite et des portraits - charges de Pablo Picasso, Paris : Éd. de La Sirène, 1923, pp. 25-26.
- 14) *Ibid.*, p. 255.
- 15) Voir Guillaume APOLLINAIRE, «La vie anecdotique», *Mercure de France*, t. 92, n° 339, 1^{er} août 1911, pp. 888-889.
- 16) Voir Victor DEL LITTO, *Bibliographie stendhalienne générale*, sous la direction de V. DEL LITTO, Moncalieri : CIRVI, 8 vol., 1999-2007, t. I, pp. 187, 192, 196, 206, 208, 216, 222, 233, 234, 238, 245, 250, 256 et 294.
- 17) Paul VALÉRY, *Cahiers*. Édition établie, présentée et annotée par Judith ROBINSON-VALÉRY, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1973-1974, t. II, p. 534.
- 18) Voir DEL LITTO, *Bibliographie stendhalienne générale*, *op. cit.*, t. I, pp. 304-305.



M. Montpyveux, M. Maurice Vergue, M. Robert Leclair, M. Ephraïm, M. Pierre Soulaïne, M. Henry Bauer, M. Jean de Mitty, M. Alfred Capus, président.

L'ACADÉMIE DE BRIDGE

L'appareil photographique a surpris quelques-uns de ses membres les plus connus de l'Académie de bridge, en fonctions.

(Cl. Je sais tout)

LETTRES INÉDITES DE JEAN DE MITTY¹⁾I. - Au Vicomte de Spoelberch de Lovenjoul²⁾

Le dimanche, 10 de juin 1894.

J'eusse voulu vous présenter moi-même *Lucien Leuwen*³⁾, Monsieur, et vous entretenir de ce Stendhal que vous aimez tant. Mais votre absence, comme mon départ pour Londres, font ajourner cet entretien que je n'osais solliciter, et que je dois maintenant à l'intervention gracieuse de M. Ludovic Halévy⁴⁾. Je me permettrai de vous demander une entrevue le prochain mois et [de] vous apporter quelques détails inédits sur notre grand homme. Je vous sais stendhalien de marque, comme je vous sais aussi grand balzacien — le plus grand — et j'attends avec impatience que vous réalisiez pour la mémoire de Henry [*sic*] Beyle ce que déjà, et si brillamment, vous avez réalisé pour l'auteur de *La Comédie Humaine*⁵⁾.

Remerciements :

Nous publions ici en intégralité six lettres inédites que Jean de Mitty adressa à Henri Cordier, à Henri de Régnier ou au Vicomte de Spoelberch de Lovenjoul, avec l'autorisation de la Commission des bibliothèques et des archives de l'Institut de France. Nous tenons à remercier vivement les membres de la Commission et son président, Mme Hélène Carrère d'Encausse, secrétaire perpétuel de l'Académie française, de leur haute bienveillance.

1) Jean de Mitty (1862-1911) : journaliste d'origine roumaine et un des premiers stendhaliens. En se fondant sur son acte de décès, M. Philippe Bodard a identifié le vrai nom de cet homme mystérieux : Mircea Barbe Golfineano. (Le spécialiste du bridge et du whist a corrigé les données de l'état civil de Mitty sur la fiche bibliographique de la BnF.) Nous remercions sincèrement M. Bodard qui nous a confié la copie de ce document précieux et celle d'un portrait de Mitty.

2) *Bibliothèque de l'Institut de France* : Ms. Lov. G 1187 / ff. 106-107. Le vicomte Charles de Spoelberch de Lovenjoul (1836-1907) : érudit littéraire et écrivain belge. Lovenjoul collectionnait les œuvres manuscrites et imprimées des écrivains célèbres comme Honoré de Balzac.

3) Mitty venait de publier chez Dentu *Lucien Leuwen*, roman inachevé de Stendhal, au printemps de l'année 1894.

4) Ludovic Halévy (1834-1908) : librettiste d'opérettes et d'opéras et romancier. Halévy était alors membre de l'Académie française.

5) Lovenjoul publia chez Calmann Lévy en 1879 un ouvrage sur Balzac, *Histoire*

Vous voudrez bien, Monsieur, trouver ici le témoignage de mon estime littéraire.

Jean de Mitty.

Rome, Brunswick, Londres, les notes de voyage inédites de Beyle paraîtront au commencement de l'année prochaine⁶⁾. Je réunis, en ce moment, les transcriptions nécessaires, et me permets, sur la recommandation de M. L. Halévy, de vous présenter un reçu de quarante francs — le prix d'un volume de luxe, tirage non mis dans le commerce et limité à 100 exemplaires. Obligé de partir pour 15 jours, à Londres, mardi, je vous serais reconnaissant de vouloir bien me laisser votre réponse, rue Louis-le-Grand⁷⁾ — où je la ferai prendre.

2. - Au même⁸⁾

Paris, le 2 d'octobre 1894.

7, rue St-Benoît.

Monsieur,

Cet été, au cours d'un voyage en Belgique, j'ai tenu à vous remercier personnellement de l'empressement que vous avez bien voulu mettre pour la transcription au [*sic*] volume inédit de Beyle : *Notes de voyage*. Malgré mes démarches, il m'a été malheureusement impossible de découvrir votre hôtel. Peut-être ai-je mal pris mes renseignements.

Je me suis présenté hier [rue] Louis-le-Grand et à deux reprises. On m'y a engagé à vous écrire. Je vous prie, Monsieur, de vouloir bien m'y laisser votre réponse à cette lettre — je passerai la prendre avant ce soir 8 heures, et avant de partir pour le Dauphiné où je vais m'arranger avec mon imprimeur au sujet du volume de Beyle.

I. À la Bodinière, et à partir du 15 déc[embre], je commence une série de conférences⁹⁾. La première est consacrée à L. Bertrand, Baudelaire et

des œuvres d'Honoré de Balzac.

6) Il s'agit sans doute des exemplaires de luxe et limités du livre que Mitty publia en 1897 aux éditions de la Revue blanche, intitulé *Œuvres posthumes. Napoléon. De l'Italie. Voyage à Brunswick. De l'Angleterre. Les Pensées. Commentaires sur Molière.*

7) À cette époque, Lovenjoul résidait 11, rue Louis-le-Grand.

8) *Bibliothèque de l'Institut de France* : Ms. Lov. G 1187 / ff. 108-110.

Mallarmé. La seconde à Balzac et à Stendhal. Me permettez-vous, Monsieur, de puiser dans vos travaux de critique et de bio-bibliographie sur l'auteur de *La Comédie* ? Je citerai les sources, bien entendu, et rendrai un public hommage à vos travaux et à votre piété balzacienne. Ces menues conférences, j'irai ensuite les faire en Belgique et en Hollande.

II. Le volume inédit de Stendhal, composé de notes de voyage et de mémoires autobiographiques ne sera pas mis en vente en librairie. Certains passages ne peuvent intéresser et même choqueraient le *goût* (!) du grand public. Le tirage (sur Japon, numéroté) ; les parures ; le luxe d'impression m'obligent à avoir de nouveau recours à mes transcrip-teurs et à leur demander une nouvelle transcription. L'ouvrage paraîtra en 120 exemplaires seulement et réservé aux seuls amateurs. Il sera de 80 francs. La majeure partie de mes souscripteurs m'a fait cette grâce d'ajouter 40 francs à ceux déjà versés.

Puis-je espérer, Monsieur, que vous voudrez bien conserver votre souscription première en y ajoutant ces 40 frs que mes ressources personnelles — celles d'un homme de lettres — sont insuffisantes à combler ? Déjà pour *Lucien Leuwen* et pour 3 ans de travail, j'ai eu toutes les difficultés.

Stendhal n'est lu que par ceux-là qui l'aiment et ceux qui l'aiment sont peu nombreux. Dans tous les cas, je tiens à votre disposition, Monsieur, les 40 francs déjà reçus — si pour telles raisons, vous désirez ne point participer de cette tentative. Ce sera pour témoigner des sommes perçues. Je vous prie d'agréer, Monsieur, l'assurance de mon dévouement le meilleur.

Jean de Mitty.
9, rue de Trévisse.

Monsieur le Vicomte
de Spoelberch de Lovenjoul
11, rue Louis-le-Grand

9) À partir du 15 décembre 1894, Jean de Mitty donna une série de conférences sur Poe, Aloysius Bertrand, Baudelaire, Mallarmé, etc., au Théâtre d'Application, illustrées par des poèmes que déclama son amie Mme Allys Arsel. Voir Stéphane MALLARMÉ, *Correspondance*, recueillie, classée et annotée par Henri MONDOR et Lloyd James AUSTIN, Paris : Gallimard, 11 vol., 1959-1985, t. VII, p. 123.

3. - À Ferdinand Brunetière¹⁰⁾

Le 6 de fév[rier 18]95.

Mon cher Maître,

On me demande, en Belgique, pour ce prochain mois d'avril, une conférence qui terminerait une série entreprise là-bas, et continuée à Paris, au Théâtre d'Application (Edgar Poe, Aloysius Bertrand, Mallarmé, Verlaine). J'ai choisi pour sujet de cette dernière conférence (destinée à être publiée sous la forme d'une étude) : *Ferdinand Brunetière : son œuvre*.

Voici des années, mon cher Maître, que j'admire votre pensée et que j'en suis les manifestations éloqu岸tes. Ma conférence ne sera donc que le résumé des notes prises au fur et à mesure que paraissaient les mémoires de la *Revue des deux Mondes*, ou que je sortais d'entendre votre parole.

Mais il me faut maintenant une lecture d'ensemble, un travail, pour ainsi dire, immédiat de votre œuvre ; de plus, une documentation précise pour le côté bibliographique de mon étude. Et c'est à ce sujet, mon cher Maître, que je me permets de vous adresser cette requête. J'imagine qu'il doit vous rester des épreuves de vos livres, des volumes hors d'usage, mal brochés ou en mauvais état. M'accorderez-vous cette grâce de me les prêter pour une quinzaine de jours ? J'en aurai grand soin et les remettrai ponctuellement.

Pardon, mon cher Maître, pour mon importunité, et veuillez agréer ici, avec mes excuses, le témoignage respectueux de mon parfait dévouement.

Jean de Mitty.

9, rue de Trévisе.

4. - Au Vicomte de Spoelberch de Lovenjoul¹¹⁾

De Paris, le lundi

[d'une main inconnue] 18 mars 1895.

Monsieur,

J'ai attendu, pour vous répondre, que me parvienne la lettre de l'éditeur entre les mains duquel figurent le manuscrit et les transcriptions recueillies. L'ouvrage ne paraîtra qu'au printemps — dans la seconde quin-

10) *BnF Richelieu* : NAF 25045, ff. 322-323. Ferdinand Brunetière (1849-1906) : historien de la littérature. Brunetière était, à cette époque, professeur à la Sorbonne et membre de l'Académie française.

11) *Bibliothèque de l'Institut de France* : Ms. Lov. G 1187 / f. 111.

zaine de mai —. Néanmoins, si vous le désirez, vous sera remboursée votre souscription dès que vous voudrez bien m'en témoigner le désir.

Je ne mérite qu'à moitié vos reproches relatifs à mon silence. À quatre reprises, je me suis présenté rue Louis-le-Grand, sans que la fortune m'ait été acquise de vous y rencontrer.

Dans quelques jours, une chroni[que] de la Cocarde sera peut-être de nature à vous intéresser. Pour le mieux documenter, voudriez-vous prendre la peine de m'indiquer le nom de l'éditeur qui a publié votre travail sur *Balzac* paru au *Figaro* ? Je vous en aurai de la gratitude.

Ici, Monsieur, le témoignage de mes civilités distinguées.

Jean de Mitty.

5. - Au même¹²⁾

Paris, le 14 de mai 1895.

7, rue Saint-Benoît.

Puis-je me permettre, Monsieur, de vous rappeler la promesse que vous avez bien voulu me faire, relative aux notes parues dans *Le Figaro* : *Balzac et Madame Hanska* ? Non seulement elles serviront à mon étude, mais encore à une conférence que je compte faire cet été, en Belgique, en Hollande, à Londres, conférence à laquelle vous aurez fourni les meilleurs documents. Je mentionnerai, comme il convient, cette contribution et choisirai cette occasion pour dire, publiquement, votre patient et si noble effort littéraire. Une requête encore, Monsieur, puisqu'aussi bien votre courtoisie est la plus effective et la plus aimable à mon égard. Ces conférences : *Balzac*, *Baudelaire*, *Villiers de l'Isle-Adam*, *Mallarmé*, précéderont deux pièces de Brandès¹³⁾, jouées par des artistes du Théâtre de l'Œuvre. En venant à Bruxelles dans les premiers jours de juin, ai-je quelque chance de réunir un public intellectuel, c'est-à-dire une partie de cette société qui, dès les premiers beaux jours, quitte la capitale pour la campagne et la mer ? C'est là, pour moi, une question capitale pour la troupe, aussi, d'ailleurs.

J'abuse, Monsieur, de votre bonne volonté. Veuillez, je vous prie, n'en garder nul déplaisir, et, dans le même temps, laissez-moi, avec déférence,

12) *Bibliothèque de l'Institut de France* : Ms. Lov. G 1187 / f. 113.

13) Il s'agit probablement Edvard Brandes (1847-1931) : journaliste, homme politique, auteur dramatique danois.

vous offrir ici mes civilités les plus empressées.

Jean de Mitty.
9, rue de Trévise.

6. - À Henri Cordier¹⁴⁾

1, Rue Laffitte.
Paris, le lundi [27 (?) juin 1898]¹⁵⁾

Vous plairait-il, Monsieur, en échange du compte rendu que j'en ferai dans *La Revue blanche*¹⁶⁾, me communiquer votre Stendhal¹⁷⁾ ? Je vous en saurai infiniment gré.

Veillez agréer, Monsieur, l'expression de mes civilités les mieux empressées.

Jean de Mitty.

7. - À Georges de Porto-Riche¹⁸⁾

Mardi [189 ?].

Monsieur,

Le Jury du concours littéraire se réunira dimanche, à 5 heures, dans les bureaux du *Journal*¹⁹⁾. Des manuscrits vous sont dépêchés par ce même courrier. Nous vous serions obligés de vouloir bien les rapporter dimanche, après examen.

Veillez recevoir, Monsieur, les assurances de mes sentiments bien distingués.

Jean de Mitty.

14) *Bibliothèque de l'Institut de France* : Ms. 5707 / f. 157. Henri Cordier (1849-1925) : sinologue, orientaliste et historien. Cordier est également un des pionniers du stendhalisme. Il publia, en 1914, *Bibliographie stendhalienne* chez Champion.

15) Sur la feuille, cette date est consignée par une main inconnue : « envoyé 26 juin 1898 ». Mais le jour du 26 juin 1898, il n'est pas lundi, mais dimanche.

16) En 1898, Mitty donna dans *La Revue blanche* (n° 17) un compte rendu du livre de Cordier, *Molière jugé par Stendhal*, publié aux éditions Tous les Libraires en 1898.

17) Il s'agit sans doute du livre de Cordier susmentionné.

18) *BnF Richelieu* : NAF 24966, f. 423. Georges de Porto-Riche (1849-1930) : dramaturge français et auteur de *l'Amoureuse* (1891).

19) Il s'agit du *Journal, quotidien littéraire, artistique et politique* (1895-1899).

8. - À Charles-Ange Laisant²⁰⁾

[189 ?]

Mon cher ami, j'ai recours à votre office. Voici M. Verdeau, dont le frère vient de mourir à Shangaï [*sic*]. Vous pouvez lui être utile en lui fournissant les renseignements, dont il a besoin.

Or quand venez-vous dîner au *Journal*²¹⁾ ? Prévenez-moi la veille par un petit mot. J'ai mille choses à vous dire et puis quelque chose à vous remettre.

La main, bien cordialement,

Jean de Mitty.

Monsieur Charles Laisant
Ministère des Colonies
Pavillon de Flore

9. - À Adolphe van Bever²²⁾

[C. P. : 9 août 1902.]

Mon cher Van Bever,

On me communique, au *Cri de Paris* — où je m'occupe de la rédaction —, votre lettre relative aux « services » du *Mercure* [*de France*]. Comme je suis chargé en même temps, de la bibliographie, vous voudrez bien, je vous prie, m'adresser les « services » chez moi, Boulevard de Courcelles, n° 6, où je reçois d'ailleurs le *Mercure*. Lorsque vous aurez besoin de mon office, ne manquez pas — cela me fera plaisir — de me mettre à contribution.

Votre tout-à-fait acquis,

Jean de Mitty.

20) *BnF Richelieu* : NAF 28336 / ff. 288-289. Charles-Ange Laisant (1841-1920) : mathématicien français. Il fonda à Paris en 1894 un périodique intitulé *L'Intermédiaire des mathématiciens*.

21) En se fondant sur cette mention, on peut supposer que cette lettre a été écrite avant 1900.

22) *BnF Richelieu* : NAF 28128, f. 160. Adolphe van Bever (1871-1925) : bibliographe français. Van Bever publia avec son ami Paul Léautaud au *Mercure de France* en 1900 une anthologie, *Poètes d'aujourd'hui (1880-1900)*, qui gagna un grand succès et qui aurait dû intéresser Mitty.

10. - À Henri de Régnier²³⁾

[d'une main inconnue] 1903

Quelle délicieuse chose que *Le Mariage de minuit*, mon cher Henri de Régnier. Votre Serpigny²⁴⁾ m'a ravi ! C'est tout son portrait. Et quel portrait ! Dès Samedi, dans *Le Cri de Paris*, j'annoncerai le livre avec toute l'admiration que j'ai pour vous, une admiration ancienne déjà, et durable, et sincère.

La main amie de

Jean de Mitty.

11. - À Jacques Crépet²⁵⁾

[C. P. : 14 janvier 1904]

Mon cher ami, je quitte *La Gazette*²⁶⁾. On ne veut plus de collaboration payée. Et puis, et puis... la maison devient louche. Pour toutes ces raisons, je me retire. Vous feriez sagement en passant à la caisse.

Votre ami,

Jean de Mitty.

6, brd. de Courcelles.

12. - À Robert de Montesquiou²⁷⁾

Le vendredi, 14 de juillet [1905].

Une petite note, que vous lirez dans *Le Cri de Paris* et que j'y ai mise avant même d'avoir reçu votre lettre, vous dira, mon cher Monsieur de Montesquiou, toute ma tristesse et toute ma peine. Je devine votre affliction. De semblables dévouements sont rares dans l'existence et l'ami que

23) *Bibliothèque de l'Institut de France* : Ms. 5707 / f. 157.

24) Serpigny est un personnage du *Mariage de minuit* (1903).

25) *BnF Richelieu* : NAF 28264, f. 24. Jacques Crépet (1874-1952) : journaliste littéraire français. Il était connu en tant que spécialiste de Charles Baudelaire.

26) Il s'agit de *La Gazette de la Capitale* qui venait d'être fondée et dont le premier numéro sortit le 17 avril 1904.

27) *BnF Richelieu* : NAF 15148, f. 160. Le comte Robert de Montesquiou (1855-1921) venait de perdre son secrétaire et compagnon de vie, Gabriel de Yturri le 6 juillet 1905.

vous avez perdu était de ceux qu'on ne rencontre pas deux fois sur son chemin. Je sais avec quelle touchante piété vous avez veillé sur ses derniers moments et de quels nobles soins vous entretenez sa mémoire — Laissez-moi, je vous prie, m'associer à votre chagrin et saluer, avec une émotion sincère, le souvenir du cher disparu.

J'étais loin de Paris lorsque j'ai appris la douloureuse nouvelle. Sans cela je serais venu à Neuilly²⁸⁾ vous serrer la main et vous dire, mon cher Monsieur de Montesquiou, que je suis vraiment, et de tout cœur, votre ami dévoué.

Jean de Mitty.

13. - À Guillaume Apollinaire²⁹⁾

[C. P. : 4 novembre 1905.]

Il serait peut-être bon, Monsieur, que nous puissions avoir ensemble un petit entretien. Si l'aventure vous mène l'un de ces prochains jours dans le quartier de l'Opéra, prenez donc la peine, je vous prie, de monter un moment au journal. Vous m'y trouverez vers les 11 heures du matin et, le soir, vers 4 heures. Je serais ravi que vous fussiez des nôtres³⁰⁾. Je vous demanderai seulement de changer la forme de vos petites notes.

Votre acquis en toutes choses.

Jean de Mitty.

Monsieur
Monsieur Guillaume Apollinaire
Boulevard Carnot, n° 8
Le Vésinet [Seine-et-Oise]

14. - Au même³¹⁾

Du dimanche au soir [1905].

Je m'excuse, Monsieur, de ne pouvoir, en ce moment, vous recevoir chez

28) C'est à Neuilly-sur-Seine que décéda Yturri.

29) *BnF Richelieu* : NAF 27157, ff. 277-279.

30) C'est vers cette époque qu'Apollinaire se mit, sans doute, en relation avec Mitty et commença à apporter sa collaboration au *Cri de Paris*.

31) *BnF Richelieu* : NAF 27157, ff. 280-282.

moi. Je m'absente dès le matin et ne rentre qu'assez tard dans la soirée. Si vous le voulez bien, je vous attendrai, lundi, à 5 1/2, au bar Calisaya³²⁾, 27, Boulevard des Italiens. J'y suis connu. Faites-moi demander, je vous prie. Veuillez recevoir, Monsieur, mes compliments empressés.

Jean de Mitty.
6, Boulevard de Courcelles.

Monsieur
Monsieur Guillaume Apollinaire
Boulevard Carnot, n° 8
Le Vésinet [Seine-et-Oise]

15. - Au même³³⁾

[C.P. : 18 décembre 1906.]

Monsieur Guillaume Apollinaire, je n'ai pu faire passer que la petite note sur Étienne — bien amusante. *Les Albanais*³⁴⁾, faute de place cette fois, ne passeront que la fois prochaine.

Je serai absent samedi et lundi. Ne venez donc que mardi, pour toucher votre copie. Et apportez-moi, en même temps, de la copie.

Votre acquis, bien cordialement,

Jean de Mitty.

Monsieur
Monsieur Guillaume Apollinaire
Boulevard Carnot, n° 8
Le Vésinet

16. - Au même³⁵⁾

Lundi [1906].

Monsieur Guillaume Apollinaire, je touche seulement terre à Paris et re-

32) Le Calysaya est un bar de style américain, inauguré en octobre 1892, où se réunissaient les bridgeurs de l'Académie de Bridge, et Jean de Mitty en était un membre fidèle.

33) *BnF Richelieu* : NAF 27157, ff 283-285.

34) *Les Albanais* d'Apollinaire furent publiés dans *Le Messidor* du 7 septembre 1907.

35) *BnF Richelieu* : NAF 27157, ff. 286-288.

pars pour quelques jours. Je ne serai là que samedi matin. Prenez donc la peine, je vous prie, de passer ce jour-là au *Cri de Paris*, car, en outre du plaisir que j'aurai à vous serrer la main, j'aurai celui de vous annoncer une bonne nouvelle. Vous avez des loisirs, m'avez-vous dit. Peut-être les pourrez-vous utiliser fructueusement.

La main amie de

Jean de Mitty.

Monsieur
Monsieur Guillaume Apollinaire
Boulevard Carnot, n° 8
Le Vésinet

17. - Au même³⁶⁾

[1907.]

Mon cher Apollinaire,

Devant votre attitude — qui m'étonne et qui me chagrine — je vous prie de ne plus compter sur moi.

Jean de Mitty.

Monsieur Guillaume Apollinaire
(Aux soins de M. Max Jacob)

18. - À Édouard Gauthier³⁷⁾

[Sans date.]

En rentrant ce matin d'Espagne, trouve la lettre de M. Gauthier. Il ira, ce soir, rue Ménars.

Le compliment distingué,

Jean de Mitty.

36) *BnF Richelieu* : NAF 27157, ff. 289-291.

37) *BnF Arsenal* : 13039, f. 94. Message consigné sur une carte de visite de Mitty. Édouard Gauthier (18.-19.) : critique de théâtre français et auteur de *L'Opéra nouveau* (1908).

19. - Au même³⁸⁾

[Sans date.]

Si flatteuse, cher Monsieur, que fût pour moi l'offre qu'il a été dans votre bonne grâce de me faire, j'ai le regret de la décliner. De pressants travaux m'occuperont cet hiver. Mais ce ne serait là qu'un empêchement relatif. Je fréquente peu le monde des théâtres ; j'ajouterai même que j'ai horreur des comédiens et que j'évite leur compagnie. Je remplirai donc très mal l'office que vous attendez de moi.

Je vous renouvelle ici, Monsieur, mon très réel regret, et je vous assure de mes sentiments de parfaite distinction.

Jean de Mitty.

20. - À Fernand Vandérem³⁹⁾

[Sans date.]

Vous m'avez ravi, mon cher Fernand Vandérem. Je ne résiste pas au plaisir de vous dire combien j'ai goûté votre réponse à Bernstein⁴⁰⁾. On ne riposte pas plus spirituellement et avec plus de grâce hautaine. D'une chiquenaude, vous avez remis à sa place cet encombrant et sot personnage. Bravo !

Votre ami, vraiment

Jean de Mitty.

38) *BnF Arsenal* : 13039, f. 94.

39) *BnF Richelieu* : NAF 16874, f. 463. Fernand Vandérem (1864-1939) : auteur dramatique, romancier, critique littéraire français. Son vrai nom est Fernand-Henri Vanderheym.

40) Henri Bernstein (1876-1953) : dramaturge français. Il fut l'auteur du drame bourgeois, *Le Voleur* (1906).